世界に通じる学生を育てるために

篠原吉徳
人間総合科学研究科教授

1. 'Key Letter'は"D"

今日、英国においては、「障害（Dis-ability）のある」子どもに対する教育は、子どもたちの能力や性格が相互に大きく異なっている、換言すると、子どもたちの諸特性がきわめて多様であること（Diversity）を前提にして取り組まれている。多様性こそが、障害のある子どもに対する教育の起点とされて、彼らには、個別化されたdifferentiated）教育が行われているのである。本節を、「'Key Letter'は"D"」と名づけた所以である。

しかしながら、英国における、このような、障害のある子どもに対する取り組みの根底を貫流する基本原則は、教育の普遍原理に相当するものでもあり、小・中学生はもとより、高校生や大学生の教育を論じる際に顧慮される必要性がある、と考える。高等教育全般という観点からも、上記の教育が重要であることを指摘しておきたい。

これより先に述べることは、筆者が一人思い、訴えようとしていることであり、イギリス人が考え、唱えていることではない。Diversityに着目してdifferentiatedである教育が行われてこそ、子どもたちはそれぞれがDevelopment（潜在的な可能性を開花させること）を達成できる。この結果、人間のDignity（尊厳）が保たれるとともに、多様性を理解し受容することにより、Decency（寛容さ）が育まれる。

人々が互いに、多様であることを認め合い、他方で寛容さをもって接しあうことができれば、そこに、共生社会が現出されるものと思われる。—論理が短絡的で、飛躍があるとの批判を甘んじて受けます—地球的な規模で共生社会を築いていくことは、地球上に住む人間の、今日的な大きな課題である。「世界に通じる」ことのなかには、この共生社会を、全世界的に築き上げることに寄与することが含まれよう。したがって、共生社会の創出のために、多様で

ある（diverse）ことを前提に個別化された（differentiated）教育を推し進めていくことは、重要なことであり、必要なことである。また、同じ理由から、学生に、この教育の意義を説くことも枢要なこととして要請されている。

2.「個性を生かす」

さて、日本において、「個性を生かす教育」が唱えられて既に久しい。個性を生かすとは、個性を伸長させる、さらには、この個性を最大限発揮して行動できるようにする、と解釈することができるのではないだろうか。上述された教育も、最終的には、この「個性を生かす」に行き着くものであろう。多様であるがゆえに、個別化された教育が行われることにより、「個性」が引き出され、高められる、と思われる。多様性に焦点が絞られ、個別化された教育と個性を生かす教育とは、軌を一にするものであろう。

強烈な個性を放ち、何時、いかなる場においても、自分の能力を遺憾なく発揮できる者に、人々の注意が集まり、一挙手一投足に注目する。これは、日本に限らず、全ての国に共通して言えることであろう。しかし、欧米諸国、例えば英国のように、かつて植民地であった国々の人々を含め、現在も、外国人を広く受け入れ、ethnic minority（White Anglo-Saxonに対する）をはじめとして異邦人が多数混在して居住する国々では、とりわけ「個性」が重んじられる。それは、自ら「個性」を際立たせることができなければ、anonymityとして、さまざまな人々で構成される集団、社会の中に埋没してしまうからである。これでは、「世界に通じる」ことを論じる以前の問題である。「世界に通じる」学生を育てるためにも、個性を生かす教育の推進が求められる。

いささかこじつけめいていて気が引けるが、「個性」を意味するところの英単語の、Individualityにも、「'Key Letter'は"D"」が該当する、と述べることができる。なぜならば、英語の辞書には、'Individual' の語源として、[in + divid, dividere 'divide'] と記されているからである。Individualityは、この言葉より派生したことばであって、「（これ以上）分けられない」の意より、「個性」を表す名詞として用いられている。

3. 'Do in Rome as the Romans do.'

たとえ、ツーリストとして逗留するものであっても、「ローマにおいては、ローマ人が振舞っている通りに、行動する」ことが大切である。「郷に入っては郷に従う」ことに努めることが、「世界に通じる」ことの基本的要件になるだろう。現地のマナーやルールに従うことが必要であることは、改めて述べるまでもない。さらに、食事を含

めて、生活に馴染み、溶け込もうとする姿勢を示すことが、相手、すなわち外人との間に横たわる心理的な溝を埋めるばかりか、心的な交流を深めることに役立つものとなろう。しかし、無理をする必要は決してなく、可能な範囲で、「郷に従う」ことを探ればよい。反対に、阿る、迎合することは、逆効果が予想され、厳禁である。

学生には、海外における、自らの、実生活での体験、エピソード、あるいは失敗談などを話しておくのが良いだろう。

4. 'Practice makes perfect.'

昨年暮れ、香港で開かれた、ある国際的な学会の年次大会で、2年振りに教え子との再会を果たした。この教え子(「I」さん、と仮に呼ぼう)は、現在、Manchester大学大学院博士課程に在籍し、博士論文の作成に取り組んでいる。大会におけるIさんのPresentationが堂に入り、立派であったことに驚かされたことを、今でも、鮮明に思い起こすことができる。鋭い質疑にも、彼女は動じることもなく、また的を射た、簡潔にして明快な応答ができていたことには、舌を巻いた。

彼女は、高校生の時に、海外赴任する父親に同行し、ノルウェーのオスロに移り住んだ。その時の生活経験を通じて、彼女の英語力、殊にスピーチの実力は培われることになったのであろう。大学生であった時の、Iさんの英語の力は、平均以上の水準にあったのは確かなことである。しかし、今日、その力は比較するまでもなく格段に進歩している。そもそも、彼女は、己の語学力を確信して、英国遊学を志したのであろうが、徒手空拳のまま英国留学をする、とは毫も考えはしなかったはずである。とは言え、不安が皆無であったわけでもあるまい。言葉の面での不安を拭い去り、Iさんを英国に赴かせた、飽くなき探究心に拍手を送りたい。臆せず、積極果敢に立ち向かった結果、英語力の進歩、向上があった。

Iさんならずとも(「Iさん、失礼!」)、語学に関しては、native speaker(英国には、さらに、母語並みに英語が堪能な外国人も多数存在する)と実際にコミュニケートすることによって、コミュニケーション・スキルが著しく熟達する、'Practice makes perfect'がまさに現実のものとなることが期待される。「世界に通じる」ためには語学力が不可欠である。しかし、こと語学力については、初めから完璧を期するのは性急過ぎるだろう。「習うより慣れよ」の俚諺に従い、多少なりとも逡巡する学生に対しても、背中を押し、海外に送り出すことが「世界に通じる」学生を育てる第一歩となろう。

5. Manchester University詣

今日、英国のManchester Universityは、「特別なニーズ教育（Special Needs Education）」の世界的な拠点となっている。それは、Mel Ainscow教授が、この分野での研究・教育活動の陣頭指揮に当たっておられるからある。教授の声名は国外にまで知れ渡っており、世界各国から、教授の謦咳に接し、講莚に列することを望む人たちが後を絶たない。Iさんも今、Ainscow教授の指導の下（推薦状を書き、academic supervisorを依頼した）、国際色豊かな学の殿堂で、研究に励んでいる。彼女は、英国人はもとより、欧州、アジア・オセアニア、アフリカ、あるいは南北アメリカ等の世界各国から集まった同学の士とdebate、declare、discussし、また自己の内奥に沈潜し、deem、deliberateし、研鑽を積むための旅を続ける。

如上の通り、例えば、Manchester大学のような国際的な大学に、好奇心が旺盛な、向学心に燃える学生を送り出すことが、「世界に通じる」（に値する；deserved）学生を育てることになろう。

（しのはら　よしのり／知的障害教育）